

50音(行)	執筆者	氏名
あ行 あいうえお	は行 はひふへほ	正島 祐子
か行 かきくけこ	ま行 まみむめも	佐々木 実花
さ行 さしすせそ	や行 やゆよ	田中 文恵
た行 たちつと	わ行 わをん	林 佑香
な行 なにぬねの		中恵 真理子
ら行 らりるれる		樫田 美雄

あ「間(あいだ)」の社会学

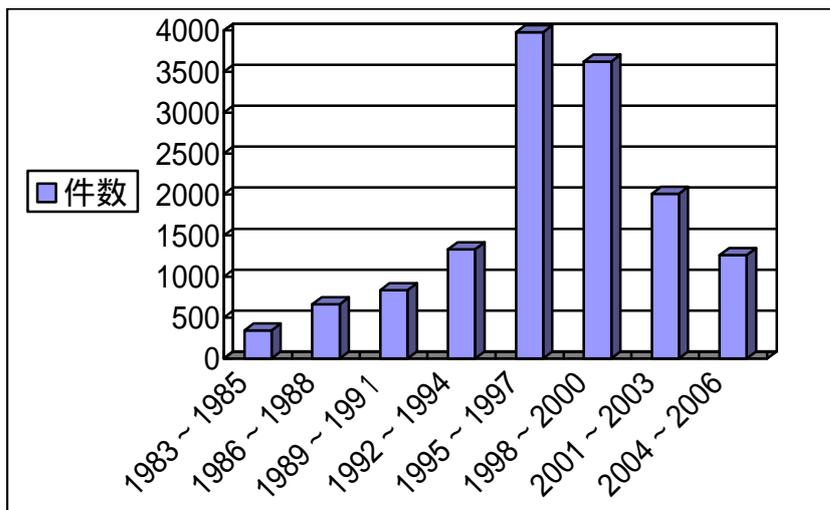
人と人との間には物理的な距離のほかに、人の心理的なものや社会的なものが隠れている。例えば大学の付属図書館を利用するといつも思うのだが、必ず人はひとつ置きに席を空けて座り、同じテーブル同士になると対角線上に座ろうとする。隣同士に座っている人はたいてい知り合いであることが多い。しかし、ひとつひとつが区切ってある部屋を見つめるとすべての席がうまっている。これは、図書館というあるスペース内でのことだが日常のあらゆる場面で人と人との間から実におもしろいことがわかるのではないだろうか。

渋谷はこういった人間と人間の間の空間を「パーソナル・スペース」と呼び、パーソナル・スペースを日常の多面的な部分からとらえている。パーソナル・スペースは心理的だけでなく社会的にも大きく影響されていることから、詳細に観察していくことでおもしろい発見ができるかもしれない。

【参考文献】渋谷昌三、1990、『人と人との距離 パーソナル・スペースとは何か』日本放送出版。

い「いじめ」の社会学

子どもの安全が頻繁に叫ばれるようになった今日、「いじめ」も社会問題のひとつとして取り上げられ続けている。いじめの原因は？どうしたらなくなるのか？こういったいじめの解決策を議論していくのも必要だが、ここでは「いじめ」が社会的にどのように問題視されているのかを「新聞」を通じてみていく。



上の図は、1983年1月1日から2006年2月6日までに発行された朝日新聞で記事に「いじめ」と「学校」の言葉を含んでいる記事総数を3年ごとにまとめ正島が作成したグラフである。検索にヒットした数を比較してみるだけでも、1994年までは少しずつ増加していたのが1995年～1997年間に3982件に急に増えていることがわかる。またそれを境に年々減少していることもいえる。

ここでは件数の比較だけを挙げてみたが記事の内容など詳細に調べると「いじめ」が人々の間にどう捉えられ、変化してきたのかが浮かび上がってくるだろう。

【参考資料】聞蔵DNA for Libraries 朝日新聞全文記事検索

う「運試し」の社会学

人はどんなときに「運試し」をしたくなるのであろうか。大抵運を試したくなる瞬間は、立ち足はだかる課題を超えようとするときにやってくるであろう。しかし課題が超えられそうもない「解決不可能な課題」だとしたら、それは運を試すには最適とはいえない。逆にすぐに解決できてしまう「解決簡単な課題」でも運を試すには最適とはいえない。「運試し」に最適な課題とはその課題が解決できるかできないか微妙なところで、なおかつその課題が失敗に終わった（よい結果がでなかった）としても自分にかかるリスクが小さいときに「よし、運試しにやってみるか。」と思うのではないだろうか。よい結果が出たら自らの成果になり、よい結果にならなくても「運がなかった。」と言えは済んでしまう。「運試し」は、どちらにも説明可能な面を秘めているいわば自分を正当化するための資源として用いられているのではないだろうか。

え「エプロン」の社会学

エプロンにはどのような役割があるか。もちろん料理をしていて着ている服が汚れないようにする役割もある。またたとえばある店に入りエプロンをしている人を見かけたら、

そこの店員であると思うだろう。このように制服としての役割も果たしている。しかし、エプロンを着てお店の中で立っている人がいたとすると、その人が店員として取るであろう行動も含めてその人は店員であると思うだろう。エスノメソドロジーではそれを「カテゴリーに結びついた行動」というが、客がそのエプロンを着て立っている人に対して注文を言うことも、クレームを言うことも実に「当たり前」なこととして成り立つのもこの「カテゴリーに結びついた行動」に説明されるといえる。

このようにエプロンをしている人(店員)、注文をする人(客)の相互行為の一部として、エプロンを捉えることも可能である。

【参考文献】山崎敬一編、2004、『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣。

お「おたく」の社会学

おたくという言葉の意味が変わってきている。今までのおたくというイメージは「部屋に閉じこもって一人でパソコンをいじっていてそういった趣味に没頭している人」といった暗い、変な人のイメージがあった。福祉社会辞典でもおたくは「1980年代後半、情報化、消費社会化が結果したパーソナリティの典型的一形態。アニメーション、パソコン、ビデオなどの一部の趣味の世界に没頭することで社会との関わりを遮断し、自分の世界に閉じこもりがちな人間のこと。」としている。しかし、そういう人たちが存在することに肯定的に捉える社会が進んでいることで「おたく」の捉え方も変わってきているのではないだろうか。

【参考文献】新井克弥、1999、「おたく」in 庄司洋子・木下康仁・武川正吾・藤村正之編『福祉社会辞典』弘文堂：91-92。

か「カラオケ」の社会学

カラオケという場を構成するのは歌う人と、聴く人である。歌う人、聴く人、という場面上的ポジションは、固定したものではなく交代でそれを任されるという仕組みがある。

更に、歌う人というポジションで果たすべき役目は、歌を歌うことだけではない、という暗黙のルールがあるように思う。つまり、歌う人は歌を歌うだけでなく、聴く人にも気を配りながら、場にふさわしい歌い方、選曲をすることが望ましいという共通の認識があるのではないだろうか。同様に、聴く人というポジションにも暗黙のルールがあると考えられる。例えば、聴く人は、聴いている間に次に自分が歌う曲を検索し、入力しておかなければならない。ただ聞いているだけではいけないのだ。ただし、次に歌う曲を検索するのに夢中になり、今歌っている人の歌を聴くことを忘れてしまうような態度も望ましくないと考えられる。バランスが大事なのである。

ポジションの割り振られ方や、割り振られたポジションでの振舞い方は、集まるメンバーによって様々な形態をとると考えられる。

き「喫茶店」の社会学

喫茶店に求めるものは時代の変化と伴にどう変わってきたのだろうか。喫茶店で流れる音楽、客層、喫茶店に来る目的、立地などからその時代を反映しているものが見えてくるのではない。喫茶店と言えばナポリタンスパゲティなどを想起する人もいるだろうが、それは人々の西洋文化への憧れを反映し、メニューに取り入れる店が多かったからではないだろうか。昔は、外食店を兼ねる喫茶店が多かったようだ。最近は、インターネットカフェやまんが喫茶などが出来、昔の喫茶店とは異なる利用のされ方がなされるようになってきた。また、ペットを中に入れることが出来るカフェもあり、利用の仕方は多様化してきている。

く「薬」の社会学

人々が薬に対して持っている期待は時代とともに変化している。病院に行かなければ薬が手に入らなかった時代、人々が薬に期待していたのは病気を治療するという目的を達成することだったと考えられる。つまり、薬は治療目的で用いられていた。しかし現在では、様々な薬が病院に行かなくても、例えばドラッグストアなどで簡単に手に入るようになった。それに伴い多くの人々が薬を手軽に飲めるようになったと考えられる。更に、薬を飲む目的が病気を治療することから病気を予防することにシフトしてきているように思われる。例えば骨粗しょう症を予防する目的でカルシウムを多く含むサプリメントを飲むなど、健康の促進、維持を図ることにより病気を予防するという目的でサプリメントや市販の薬を利用する人が増えてきているのではないだろうか。

更に、サプリメントや市販の胃薬などは飲んでいれば安心するという効果もあると考えられる。それは、人々が薬の効果を期待し、信用している部分が多いからではないだろうか。

け「喧嘩」の社会学

喧嘩は相手がいなければ成り立たない。喧嘩をする相手によって態度や、手段などは変化する。殴りあい、口げんかの他にも、お互いに無口になるというタイプの喧嘩もある。喧嘩には、相手の出方によって自分の出方を決めるという側面がある。そこには、相手の出方を見てリスクも考慮に入れ、最も適切な出方を選択するという策略が潜んでいるのである。喧嘩にもルールがあり、お互いにとって全く利益の上がないことは避けるよう働きかける合図のようなものがあると考えられる。

こ「言葉遣い」の社会学

言葉遣いは常に変化している。例えば、昔から使われてきた言い回しが別の言葉で置き換わる、また、全く別の意味に捉えられるようになるなど、様々な変化を遂げる。言葉遣いの変化は社会の動きを表している。

さ「サーカス小屋」の社会学

私たちが映画を観たりする時、特に外国の映画を観るとき、外国の古いサーカス団や、田舎町などをまわる小規模なサーカス団を目にすることがある。その団員の中には、病気のために成長が止まりまるで子どものような容姿をした方や、身体に障害を持つ方などがしばしば見られる。また、日本においては、昔のいわゆる見せ物小屋も同様であると考えられる。

それらの人びとが、自分の障害を「見せ物」として観客に披露し、生活するために稼ぐという人権を無視したような（当事者たちがそう考えていなければどうかはわからないが）ある種特異な社会であると思われる。当事者達がどのように感じその仕事に従事しているのか、また、そこではどのような生活がなされどのようなコミュニティが形成されているのかということが考えられる。

し「食事」の社会学

今日、日本において経済は発展し、人間が人間として生きていける最低限の生活は保障され、全世界においてもそれを超えて豊かな社会となっている（ホームレス等の問題はあがあるが）。そういった状況の中で、生きるための食事から、「生きるため」の意を超えて、健康のため、楽しむためといった、食事に対する姿勢が見られるように思う。そういった中で、家族が同じ時間に食卓を囲むことができずに、家族団らんの場が持てないとか、手軽に食べられるが栄養に偏りが見られるファーストフードを多様するといった様々な問題が挙げられる。

社会が豊かになり飽食の時代にあるけれども、その反面そのことによって生み出された新たな問題について考え、クリアしていかなければならない。

す「スポーツ」の社会学

現在、多種多様なスポーツが存在し、メディアでも毎日、野球やサッカー等の試合結果や情報等を目にする。が、プロ野球やプロサッカーといったことを想像するとき、男性がするスポーツであるといったイメージが浮かびやすい。もちろんプロの女子サッカー選手などをテレビで拝見することはあるが、男性選手に比べると格段に少ないように感じる。スポーツをするといったときに、性別によってそのスポーツが決まってしまうのか、そのスポーツにとって性別が規範となるということがあり得るのだろうか。

せ「選択すること」の社会学

日々の生活の中で、選択をするという場面は至極当たり前の場面で、選択を繰り返すことで日々の暮らしが積み重ねられている。

私たち多くの日本人は、生まれたときから何の迷いもなく、日本人として日本語を話し、

日本人ということこそ意識することもなく生活している。しかし、他国を考えると、多言語国家（日本もそうであり、単一言語国家を探す方が困難であると思われる）が多く見られ、同国内においても予想をはるかに上回る数の言語が話されている。フィリピンではその話される言語によって社会的な階層が分けられ、母国語ではなく英語を話せるものが高い階層となる。英語を話せなければ、高い給料がもらえるような管理職といった仕事につくことは難しい。言語アイデンティティは自己を自己と見なすことのできる資源の一端であると考えられるが、そういった状況の中で彼らは、どのように考えどのように言語を選択しているのだろうか。

そ「葬儀」の社会学

自身の経験から、「お葬式」は地域コミュニティ全体の行事であるといえると思う。しかし、現在では農村部においても自宅ではなく葬儀会社の式場で行うような、近隣住民の手を借りないような葬儀が多くなってきているのではないだろうか。都市部では更に加速し、親戚にも教えずに家族内だけで葬儀を行うといったことがあるようだ。昔葬儀における近隣者や親戚の役割や関係はどのように移り変わっていったのだろうか。

た「体操」の社会学

私たちが小学校で行っていた体操は、皆で動きを揃えることが重視されていた。戦時中は軍事訓練・軍事教育を目的として行われていたが、その名残であるとも考えられる。戦後は、体を発達させる為、体力をつける為という意味づけになった。現在は、皆でいっせに行うラジオ体操を始め、個人のペースで行うストレッチやヨガなど、様々な体操が注目されている。女性誌などでも、ストレッチやヨガの特集が組まれているのをよく目にするようになった。その目的としては、健康増進やダイエットが挙げられる。体操に対する意味づけは時代と共に変化している。その意味づけをみていくことで、その時代の人々の価値基準などが分かるのではないだろうか。

ち「チャイルドシート」の社会学

子供は社会的に守られる存在であるという考えが反映されている。また、車が普及し、車による事故が多い中で、車を無くすのではなく、事故時の被害を少なくするという対策のひとつでもある。

つ「つまみ食い」の社会学

つまみ食いは、人々が考える食事の形から逸脱している行為としてマイナスのイメージが強い。しかし好きな時に少しだけ食べるつまみ食いは、とてもおいしく感じられる。その特徴を利用したのが居酒屋ではないだろうか。好きなものを少しずつ、たくさんの種類を食べたいという人々の願望とマッチし、普及していったのではないだろうか。

て「テトリス」の社会学

上から落ちてくるブロックを積み上げて消していくゲームである。10年ほど前に、携帯できる小さなテトリスが流行した。現在は、携帯電話でダウンロードでき、いつでもどこでも手軽にできるようになった。それに加え、やり始めてもすぐに終わることができるため、待ち時間など、ちょっとした時間を潰す手段として、利用されていることが多い。携帯電話の普及とともに、テトリスに対する人々の意味づけも変わってきたのではないか。ゲームを楽しむという目的に加え、手軽に時間を潰す手段としての意味づけである。また、通常、携帯電話を触っている人に声をかけたりすることは避けられる。よって、個人主義の社会を表しているともいえる。

と「時計」の社会学

我々の社会では、時計は時間を知る為の道具として必需である。例えば学校の授業も時計の指す時刻を基に始まり、終わる。時計があるおかげで、我々は共通の時間を持つようになり、一日を効率よく使えるようになったはずだ。その一方で、「時間に縛られる」という言葉があるように、時計がある為に「時間」という実態のないものに人々が拘束されているのが、我々の社会である。

な「夏休み」の社会学

現代では企業、官庁などにも普及したが、元々は、近代学校教育制度によって登場した「休日」である。特徴としては欧米諸国と比べたとき、正月休み、ゴールデンウィークなどとともに、一斉休暇的な感覚である。これは日本人の画一主義、横並び主義の表れとよく言われる。実際、企業では8月15日の盆を中心として一斉休暇に入り、帰省ラッシュがおこる。ただ過ごし方としては、盆の祭礼や祭りを中心としたものから、リゾート型、マリンスポーツの流行のように個人化していくながれにあるようだ。

に「日記」の社会学

日記が広く一般化してきたのは、学校が誕生し文字が普及したことと関係する。学校は、書く習慣をつけさせるために日記をつけることを指導したが、これは農事記録をつけるといった実務的な効用を考慮したものだった。しかしこれが結果的に、私的な内面の記録となり、自己を省察し内省する近代的個人を生み出すきっかけとなった。しかし、90年代に入り、コンピュータ通信の発達で、人に読まれるものとしての日記、他者に向けられた自己創造としての機能を持つようになった。日記はコミュニケーションの手段へと変化している。

ぬ 「ぬるま湯」の社会学

ぬるま湯とは温度の低い湯、風呂のことであり、ぬるま湯につかるとは現在の安楽な境遇に甘んじてぬくぬく過ごすことを指す。一昔前までは、日本のサラリーマン生活を指し、「こんなぬるま湯生活嫌だ」という若者が自分探しの旅に出るといったストーリーに使われていた。ぬるま湯という言葉は、ウサギ小屋の企業戦士といわれた日本社会のもう一つの側面を言い表したものである。

ね「眠り方」の社会学

フィリップ・アリエスの「子供の誕生」によれば中世では子供は家族とともに同じベッドで眠っていたという。近代に入って子供部屋と大人部屋が生まれ、保護し依存させる対象としての「子供」が誕生した。また日本では個室としての子供部屋が普及するのは、昭和40年代に入ることであるが、子供の自立性を養う上でのこの判断は、家族の団らんを壊し、非行の温床になるというような批判もあった。

の「野の精神（の現代的課題）」の社会学

かつて在野の精神という知の在り方があった。権力を志向せず、民のなかにあるというスタイルである。現在民衆や庶民といった言葉で、対立軸を設定できなくなる状況の中で、野の精神がどんな層の言葉を代弁していくかも見えなくなった。また在野の精神を掲げる大学もいくつかあるが、こうした言葉の伝統に熱くなる学生は存在するのだろうか。

は「ハンバーガー」の社会学

ハンバーガーのイメージを聞かれたら何を思い浮かべるだろうか。「早い」「手軽に食べられる」といった良い面も出てくれば「食べ過ぎるとよくない」など現代食生活の乱れの代表として思い浮かべる人もいよう。

日本マクドナルドのCMに「ファーストフード。そのおいしさや安心は、スローにつくられています。」というフレーズがある。これもイメージの変容をねらったひとつの戦略である。イメージとはそのものに良い面を与えもするし悪い面を与えもする。企業や社会が生み出す「イメージ」で「ハンバーガー」を捉えてみるのもおもしろいだろう。

【参考資料】日本マクドナルドホームページ www.mcdonalds.co.jp

ひ「病気」の社会学

病気にかかるといつもより周りから心配されるといった経験は誰にでもあるのではないだろうか。ここでは治療すべき対象としての「病気」ではなく、病気と人から判断されたり認められたりするラベルとしての「病気」を考えることをしてみたい。ラベルは社会から貼られるものでありそれによってラベルが貼られた対象者は、社会に対する見られ方が大きく変化することもある。病気にかかることと特別扱いにされるのも、病気というラベルが引き起こしたものであるといえるのではないだろうか。

ふ「不潔」の社会学

人がどのような時に不潔とを感じるかは、清潔が必ず相対的になければ感じることはできない。つまり、他人が不潔と感じたときはそのひとの清潔がどのくらいの感覚なのかを見ることができるともいえる。不潔とを感じるか清潔とを感じるかの程度は個人によっても違う。また同じ国にいとそれは少しの差を感じるかもしれないが、国が違つとますますその程度も変わってくる。不潔か清潔か決めているのは自分のようで実は自分の置かれている環境に大きく左右されている。社会学でいうとそれは、「集団」や「文化」とリンクさせて考えることができるであろう。

【参考文献】白樫三四郎編、1997、『社会心理学への招待』ミネルヴァ書房。

へ「へこむ」の社会学

NHKの番組「お元気ですか日本列島」の気になる言葉で「へこむ」という言葉が取り上げられていた。それによると、

- ・へこむ＝一時的で軽傷の場合（例えば成績が悪かった、等）
- ・落ち込む＝継続的で重傷の場合（例えば異性にふられた時、等）

と若者は使い分けているということであった。落ちこむことにも程度をつけその程度の差ごとに違う言葉を使うのは、落ち込む機会も増えまた落ち込むといったひとつの言葉では表すことができないくらい落ち込む種類も増えてきたのであろうか。アンケートでの意識調査からこのような問いにアプローチしてみることができるのではないだろうか。

【参考資料】日本放送協会ホームページ <http://www.nhk.or.jp/>

ほ「保育園」の社会学

少子化対策により、幼稚園にも保育園と同じような機能（時間延長保育など）をつけたサービスをつけられるようにしている。保育は今までどのような流れで日本に存在しているのだろうか。そしてそのようなサービスは保育園側、利用者側にどのような影響を与えるのか。インタビュー調査などを通じて今後の「保育園」「幼稚園」のあり方を考えていく。

ま「マンション」の社会学

マンションの隣同士の住人はどのようなコミュニケーションのとり方をしているのだろうか。例えば、新しく入居する時、隣近所に挨拶をするという習慣は現在もあるのだろうか。また、隣の住人の騒音が激しい場合、どの程度の抗議なら許されるのだろうか。例えば隣に向かって「うるさい！」と大声で叫ぶ、ドンドンと壁を叩く、などの方法が考えられる。更に、隣の住人にばったり会った時、どのような態度を取ることが望ましいとされているのだろうか。知らないふりをする、会釈をする、会話をする、など様々なパターンが考えられる。これらは、住人により異なると考えられるが、どのようなコミュニケーション

ヨンのあり方が最も心地よいかは、生活の中で試行錯誤しながら見出されていくのではないだろうか。毎日の、壁を隔てたコミュニケーションの中でお互いにとって最も居心地の良い接し方が生まれていくのである。

み「見つめること、見つめないこと」の社会学

人をジロジロ見るという行為はあまり好ましくないという印象があるが、実は普段よく行っているのである。例えば美容院で、鏡越しに美容師を観察する、電車の中で、視線を合わせないように調節しながら他人を観察するなどの行為を例に挙げることが出来る。また、赤ちゃんもじっと人を見つめることがある。見つめるという行為は社会的な経験が未熟な赤ちゃんでも為すことができるのである。それに対し、見つめないという行為を、私たちはいつ身につけるのだろうか。見つめないというテクニックは発達の中の段階で学習されるのだろうか。見つめないテクニックを身につけないまま、見つめることだけを実践するのが許されるのはいつまでなのだろうか。私たちは見つめないテクニックを身につけることにより、見つめる機会を再び獲得したのではないだろうか。

む「無駄」の社会学

無駄と捉えられるものは時代とともに変化していく。例えば、食事に時間をかけるのは無駄なことだという考え方から、ファーストフードが発達してきたが、現在アメリカでは口ハスという考え方が注目されているようだ。(LOHAS = Lifestyles of Health and Sustainability) これは、ファーストフードの考え方とは対称的である。社会生活全体を健康的で持続可能なものに変えていこうとする取り組みである。これまで無駄なこととして排除してきたことを見直していく動きの1つとして捉えることができるだろう。

め「目」の社会学

「目を見る」ということに対して人々が持っているイメージは国によって違うのではないだろうか。日本以外のある国では、電車などで他人と目が合ってもあわてて目をそらすことはない、ということを知ったことがある。一方日本では電車で目が合った時困るから、読む気はなくても本を開けていたり、目を瞑っていたりする。日本人にとって「目を合わせる」ということは何か特別な意味があるのではないだろうか。

も「餅つき」の社会学

餅つきの行事は、時代とともにどのように変わってきたのだろう。昔は杵と臼を使って搗いていた家も多くあっただろう。現在は機械を使って搗く家の方が圧倒的に多いのではないだろうか。また、餅つきの行事は近所づきあいとどのように関わっていたのだろうか。餅つきの形態が変化することにより、近所づきあいも変わってきたのではないだろうか。

や「優しさ」の社会学

私たちが日常使用する言葉は時代によって変化し意味も変わっていく。今日使用されていたり、感じ取ったりする「優しさ」とは、いつ頃から定義されるようになったのだろうか。おそらく1000年前のそれとは、意味も使い方も異なっているだろう。その移り変わりや変化、またはその起源が、その時代時代を代表する文学・小説等を見ていくことで、考察できるであろう。

ゆ「結納」の社会学

結納というと、少し古くさく聞こえ、昔と比較すると多少減少しているかもしれないが、現在も続いている結婚前の伝統的な儀式であると思われる。その起源がいつ頃からなのだろうか。また、現代の結婚観としては個人と個人の結婚というのが多くなってきていると思うが、結納と聞くと家と家との結婚というように思われる。婿と嫁の両家の金品のやりとりで、「家に嫁をもらう」というような、家と家との結婚という（古い）考え方、慣習がまだ存在しているのはどうしてだろうか。また、現在の結婚観はこれからどのように変化していくのだろうか。

よ「装い」の社会学

私たちは、常に衣服をまとい化粧をし身体を着飾り装うことで、生活をしている。衣服をまとうことは、社会生活をおくるなかで規範とされることである（そうしなければ犯罪者になってしまう）が、それを超えて私たちは、自分の好みに合う服装や、流行の服といったオシャレをする。化粧においては、しなくても犯罪者にはならないけれども（社会人としての身だしなみであるともいえるが）より美しくみせるために、化粧をしたり、アクセサリーを着けたりする。こういった衣服に対する考え方はどのように起こりどのような移り変わりをしていたのだろうか。

ら「ラジオ」の社会学

ラジオは、テレビとは違うメディアとして発展してきている。同じマスメディアとひとくくりにはいけない。ワイドショー化、アナウンサーのパーソナリティ化、これらの番組づくりの変化の背景にあるのは、「少数者のためのメディア」になったというその「視聴者像の変化」だ。昼はドライバー、休日は農業労働従事者、深夜・早朝は、高齢者、テレビをみる「大衆」とはちがったターゲットがねらわれている。しかし、このような細分化されたターゲットの取り方こそは、「成熟した消費社会」「消費のフレキシビリティが増大した現代的消費社会」にふさわしいマーケティングのあり方なのではないか。

ラジオ番組を送る側がどのような戦略をとっているかを、長期間のラジオ局における参与観察で解明する。

り「リスト」の社会学

ものをその名前や属性によって並べること。リストを定義すれば、このようになるだろう。ただ並べれば良いわけではない。ある基準に基づいて並べることがそこでは実践されている。ある並べ方を「当たり前」とみなせるかどうか？、ある並べ方から、どのような新しい発想が触発されるのか？、リストをめぐる社会学の領域は思いがけず広い。

本研究では「リスト」に関連しての「カテゴリー」研究を試みる。並べる、という原初的な秩序形成作業の中に私達の社会観が透けて見えてくることだろう。

る「ルックス」の社会学

コンビニの蛍光灯の明るさは、商品を買わせるための明るさだという。光はおもいのほか低消費電力によって提供可能なので、このような使われ方もされるようになったのだろう。その一方で、個室系の居酒屋では「間接照明」ばやりである。この「明るさ」と「暗さ」をめぐる配置の現代的有り様を、フィールドワークによって探っていきたい。

れ「冷蔵庫」の社会学

冷蔵庫は、1950年代までは存在しなかった。ひとびとは、その日食べるものをその日つくるかし、保存した食物を食べたい場合には、塩蔵品、乾物で対応するしかなかった。しかし、冷蔵庫ができたおかげで、様々な食品をかなり生のまま保存できるようになった（と宣伝されていたはずだ）。

ところが、現在（2005年）、このような、当初期待された使われ方を冷蔵庫はされているだろうか？コンビニにいけば、24時間営業のスーパーに行けば、つねに新鮮な食材が存在する。家庭内で食物を保存する必要性低下している。にもかかわらず、私達の冷蔵庫は満杯だ。「そろそろいいだろう」と、たべなくなったものの、すぐに捨てるのは惜しい食物の、時間稼ぎ安置所化している。これはどうしたことなのか？

冷蔵庫の機能は、変化している。その変化を複数の家庭の冷蔵庫の実際の使われ方を追うことで明らかにしよう。組み合わせデータとして、各世代別に過去の冷蔵庫の使われ方をインタビューしよう。

る「ロボコップ」の社会学

古くて新しいテーマ。「自分捜し」。ロボコップは、自分を探す。私達人間は、自分の似姿が、どのように「自分捜し」をしているか、に惹かれて「ロボコップ」の物語を紡ぐ。「似姿」の問題こそ、「神学」の根源的問題であったことなど忘れて、新しい「似姿」の物語を紡ぐのだ。しかし、そのような作業の歴史的伝統性が、ついにはいま失われつつあるのではないか。「個人」を「謎」としつつ、「個人」を育ててきた、「近代の物語」が失われようとしている。この本当の「展開期」を、とりあえずは「ロボコップ・シリーズ」に対する緻密な映像分析によって実現していきたい。

わ「笑い」の社会学

笑うことは体に良いということは、医学的にも言われている。人々は漫才やコント、喜劇を観る為にお金を払う。テレビでも、バラエティと呼ばれる領域で、笑いを提供している番組は数多い。現在の日本では「笑い」はひとつの市場となっているといえるだろう。

を「(くっつき)を」の社会学

私たちは「を」を、くっつきの「を」と呼ぶ。「を」と「お」は発音するときには同じであるが、書くときは区別される。人々はその区別をどのようにして習得するのであろうか。その過程を観察してみるのもおもしろいかもしれない。

ん「ん？」の社会学

人々が相手に疑問を示すときに使われる。この場合、顔の表情がセットであり、重要である(大抵の場合は「ん？」というときには目を見開く)。言われたほうは、その一言と表情から相手が理解していないと判断する。また、この「ん？」は相手に会話を移すサインでもあり、言われたほうは何かしゃべることが求められ、言われた本人も求められていると判断し、話始める。会話場面においては、自己訂正は他者訂正よりも優先されることから、「ん？」は相手を否定せずに疑問を表す方法であり、相手に配慮を示しているといえるのではないだろうか。

徳島大学総合科学部社会学研究室報告 既刊（国立国会図書館等所蔵）

- | | | |
|----|--|------------|
| 1 | エスノメソドロジーとその周辺
- 平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 1998年3月発行 |
| 2 | ラジオスタジオの相互行為分析
- 平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) - | 1998年10月発行 |
| 3 | エスノメソドロジーと福祉・医療・性
- 平成10年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 1999年2月発行 |
| 4 | 障害者スポーツにおける相互行為分析
- 平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) - | 2000年2月発行 |
| 5 | 日常生活の諸相
- 平成11年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2000年2月発行 |
| 6 | 現代社会の探究
- 平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2001年2月発行 |
| 7 | インタビューと対話の相互行為分析 気配りと配慮の社会学
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) | 2003年2月発行 |
| 8 | インタビューと対話の相互行為分析 気配りと配慮の社会学
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) | 2003年9月発行 |
| 9 | 社会学の窓 - ドラマティックな日常生活 -
- 平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2004年2月発行 |
| 10 | 義肢・装具のエスノメソドロジー
- 平成16年度徳島大学総合科学部地域調査実習報告書 - | 2005年2月発行 |

生活の中の相互行為

(平成17年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 -)

発行日 2006年2月14日

編集 榎田美雄

〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

(088)656-9308 E-mail:Kashida@ias.tokushima-u.ac.jp

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/index.html>

発行 徳島大学総合科学部社会学研究室

印刷・製本 平成17年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール
